

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

ホームページ <http://shakaitsushin.cool.coocan.jp/> e-mail: [shakaitsushin@nifty.com](mailto:shakaitsushin@nifty.com)

東京都渋谷区本町六丁目二八―二―九〇四 電話・FAX(03)3299-5367

郵便振替 〇〇一〇〇―九―五八四三一 労金 中央労金本店 No.1154163

## くもくぐく

### ■巻頭言■

闘い 労働者思想を学ぶ

国労上野反合研：2

人権 教育実践 報告

藪 芳郎：5

―「二年間の講師としての2021年度」―

資本所有からの経営の分離

原 野人：11

―カール・マルクスと向坂逸郎(4)―

唯物弁証法 「否定の否定」

滝野 忠：13

―斎藤君はマルクスをどう歪めているか(九)―

読者からのおたより

.....16

# 旬刊社会通信

NO.1352

二〇二二年一月一五日号

二〇二二年一月一五日発行  
(毎月一日・一五日二回発行)

## 闘い 労働者思想を学ぶ

「国労上野反合研 2022年方針」

## 1、労働者を取り巻く情勢

- ① 新型コロナウイルス感染症拡大による影響で社員の安全が脅かされている中でも、JR東日本は「変革2027」のレベルとスピードをあげるとして、生産性向上や合理化を推し進めている。労使関係では、2018年以降、JR発足以来30年以上続けてきた「労使共同宣言」によるJR東労組との協調政策を打ち破り、自前の組織「社友会」に社員を組織しながら労働組合に対抗し、労働者を「会社と社員の関係」だけに囲い込もうとしている。
- ② 岸田政権は「新しい資本主義」を標榜しながら、「分配」・巨額のバラマキとともに、賃上げをした企業への優遇税制に見られるように、企業への見返り・成長政策も行おうとしている。資本家のための政策をする政権であることはこれまでの安倍・菅政権と変わらない。より危険であるのは、両政権がなしえなかった「敵地攻撃能力の保有」をも公言していることである。沖縄の辺野古新基地建设や平和憲法改悪への姿勢と合わせ、警戒しなければならない。

## 2、反合研の基調

- ① 労働運動は、資本の利潤追求・労働者への搾取強化に対する自然発生的闘いとして起こり、多くの犠牲を出しながら労働者階級は、資本と闘い続けるための「労働者思想」と、継続する団結組織である労働組合の大切さを学んだ。
- ② これに対し資本は、労働者の闘う思想と団結を切り崩すために、「労使協調」の思想に基づく第二組合結成や、労組幹部丸抱えなどによる労働組合の体制内化をたくらみ、今日の労働運動の低迷に至っている。我々はこれを、国鉄分割民営化（国労排除の労務政策）と総評解散・連合結成で目の当たりにしてきたが、資本と闘う労働運動を根絶やしにする攻撃は、今なお資本による「生産性向上」などの思想攻撃を中心に、組合幹部・組合員の対象を問わず、やむことはない。
- ③ 労働者が「健康で文化的な最低限度の生活」（憲法25条）や「人たるに値する生活」（労基法1条）（つまり、「大幅賃上げ」や「合理化反対」）を要求し闘うことは、利潤追求のためには労働者を犠牲にする資本と闘うことを意味する。労働者と資本の利益は相反するのである。だから資本は必死に労働者の立ち上がりを抑えようとし、弾圧・懐柔・分断などあらゆる手を使う。労働者は闘わなければ生きられないし、「労働者思想」を学ばなければ、闘い続けることはできない。闘い、学び、団結（＝組織拡大）することが、今の国労運動にとって重要であり、反合研は、この立場から国労運動の強化に貢献し、資本と闘う労働運動の再生を目指す。

## 3、我々はどう闘うか

- ① 春闘・期末手当など、大幅賃上げに向けた闘いについて  
ア、「生活実態からの賃上げ要求」が基本である

国労の賃金アンケートが形骸化され、生活実態からの要求額が「高すぎる」という理由で、機関の要求決定では無視されている。しかし我々が「生活実態」を問題にするのは、生活実態からのナマ要求額を大事にする意味もあるが、それ以上に、「低賃金であること」を具体的に認識し、低賃金に怒りを持つためである。怒りのない職場に、団交を後押しする力はなく、怒りのない役員では会社と渡り合えない。イ、会社は莫大な利益剰余金を抱えている

賃上げ要求の場合、特に「原資」が問題になるが、会社は莫大な利益剰余金を抱えている。確かにそれらは、必ずしも現金預金の形はしておらず、駅や車両といった形で存在するが、労働者から搾取した剰余価値の蓄積以外の何ものでもない。会社は「コロナ・減収減益」を理由に要求を拒むであろうが、株主にはそれでも配当を行っていること、安全のためだけではない投資も行っていること、従って「原資がない」とは言えないはずである。

ウ、「価値を生んでいるのは労働者である」ことに確信を持つ

列車を動かす、価値を生んでいるのは労働者であること、株主は何の価値も生みだしていないことについて確信があれば、「ステークホルダー」などという、労働者も株主も一緒くたにしたような議論に惑わされることはない。賃金とは何か、会社の儲けはどのようにして生じるのかという、基本的な学習が大切になってきている。また、労働者同士の競争激化にならないような、人事賃金制度が必要である。従って、労働者に昇職・昇給の夢を見させながら、責任を押しつけ、管理強化、全体の賃下げを狙う、能力主義や成果主義の強化に反対していく。

エ、賃金水準は、労資の力関係で決まる

「生活できる賃金をよこせ」と要求する労働者と、「今は会社に余裕がないから我慢を」と一步も譲らない会社。団体交渉での駆け引きは平行線となる。この場合、ことを決するのは労使の力関係である。仲間内にひび割れが少ない、団結力が強い方が勝つ。労働組合は、大衆闘争・ストライキにより、労働者意識と団結力を強めなければならない。

## ② 反合理化闘争強化に向けて

ア、「柔軟な働き方」「生産性向上」など、諸合理化の狙い

会社は、機械化・無人化・兼務（多能工）化・業務委託等の合理化施策により、要員の削減を目指し、より少ない人数での増産・増発を目指している。合理化がもたらす、労働者への犠牲（雇用破壊、労働条件の低下）、乗客へのサービス低下、列車運行の安全性低下について、具体的に明らかにし、労働者、利用者、地域に対して暴露していく。

イ、健康で明るく働き続けられる職場を作る闘い

合理化が進めば、健康で明るく働き続けることはできない。「健康で明るく働き続けられる職場」を作るための日常的な闘いが、反合理化闘争の土台をつくる。仕事量・長時間労働・要員不足（そして低賃金までも）は一体のものである。日常的な仕事量の多さ、時間外休日労働の多さの点検をもとに、労働組合の闘いを「合

理化反対」の旗印の下、要員獲得闘争、権利破壊・労働条件低下を許さない闘いと組織していく。

具体的には、労働時間・休日・休憩などを巡る労働法上の権利の確立、労基法や36協定に基づく点検摘発の取り組み。職場の安全衛生の強化、パワハラ・セクハラ撲滅、安全衛生委員会の取り組み。

そして、組合所属を問わない仲間同士の競争排除、仲間としての団結作り。年に1回は行われる「職場過半数労働者代表選挙」に立候補し、国労らしい主張を掲げて闘う。

ウ、団体交渉の形骸化を許さない。

会社は分割民営化以降、交渉事項・交渉委員・交渉時間などに制限をかけ、JR東労組優先などの差別的取扱いにより、要求を出しても交渉を設定しない、実施日間近になってからの合理化提案など、あらゆる手法で、団体交渉を形骸化させてきた。こうした会社の姿勢を許さず、職場の切実な労働実態が会社に届くような、職場での現場長交渉、支社・本社段階での団体交渉を目指していく。

### ③ 国労の未来を担う青年の組織化、成長を見守る

ア、「代表選挙」で支援してくれる若い仲間には、国労加入を勧め、組織を拡大する。イ、加入してくれた青年労働者には、会社から繰り返し思想的な働きかけが行われ、会社側への抱き込みと脅しがかげられ、転勤などにより孤立させられる。このため、若い国労組合員を守り育てることが、組織拡大とともに大切な我々の仕事になる。ウ、何よりも、「なぜ、労働組合に団結するのか」「資本主義社会における資本家と労働者」「職場を変え、社会を変える」といった、権利意識、労働者意識、労働者思想が、長い目で見て、自分や仲間との団結を支えることになる。

「資本と賃労働の対立」という資本主義の本質を学び、労働者思想の強化が図れるような学習会を強化し、組合機関でも取り組めるよう努力する。とりわけ国労組合員が退職する中、若い組合員が会社によって孤立させられ展望を失うのを防ぐために、新規加入組合員の会社からの自立性、国労の将来への展望が持てる階級性、若い組合員同士が交流し助け合える協調性が求められる。とりわけ他職場との交流は、視野を広くさせる。若い組合員が成長できるための学習と交流、「組織強化」の課題は、機関が最も重視しなければならない課題である。

### ④ 反合研としての理論強化の取り組み

反合研としては、社会発展の歴史としての唯物史観、搾取と剰余価値を中心にした資本主義社会の仕組みを学ぶ学習の強化に取り組み、自分の取り組みへの総括・自己批判と仲間同士の突合せ・相互批判を通じ、お互いの成長と団結を強化する。そのために、月一回程度の学習会（会社内外の情勢討論を含む）を基本にししながら、年一回の合宿、総会を兼ねた新春学習交流会を取り組む。

また、平和憲法や労働法制を守る闘いを通じ、新東京支部の発展強化のためにもこれまでの「三支部交流会」を発展継続させる。

（国労上野反合研）

# 人権教育実践報告

―「二年間の講師としての2021年度」―

はじめに

二年間余りの講師という条件で、どんな人権教育ができるだろう。そう思いながらの日々の格闘だった。

- ①授業の中で人権に関する内容を展開して、生徒達から何が学べるか。
- ②コロナパンデミック(というパニック)の中でも、どう人権を守ろうとするか。
- ③教育課題が判然とする生徒達(人権学習会に参加する生徒など)にどう向き合い、何をし、何が学べるか。
- ④進路保障の課題に自分の立場から、どう対応できるか。
- ⑤周囲の教員仲間にどう伝えるべきものを伝え、何が学べるか。

やれたことと、学べたことなど

## ①授業の中で

a、授業開きから(生物基礎一年生)

教科書の内容は、今の社会の再生産(例えば、バイオ研究者作り、大学学習の基礎など)や教養のためであり、地域の私たちが生きることによく役立つものばかりとは言えない、したがって、地域や生徒達の課題を探し、共に考え、学ぶことも盛り込んでいこうと思うと表明。更に、「生命や環境」の勉強会(ゼミ：人権課題も重視できる)を参加者があるならやってみたいと提案。(二名参加の意思表明)

◎細胞：個別化された単位という感覚から「原始細胞の融合」という新たな「生命観」への飛躍を目指す。↓協働する生命「個人主義・利己主義」から進み、「共同社会の可能性」という人権課題の基本的考えに通じるように思う。

◎酵素：複雑な立体構造を持つよう進化した有機物の代表として、機械的見方をしがちな物質観から、複雑な作用を持ち、動的に変化する物質として、有機物をとらえる新しい生命観に触れることで、生命の尊厳(人権課題)を導き出す契機となる視点を提示した。

※現代の機械的科学技术の発展は、生命の機械的見方をもたらしてきた。

バーチャルなゲーム等でのリセット的感覚の進行は、「自殺・他殺」の感覚の歪みをもたらしている。基礎科目の単位数不足により、実験に用いる時間の不足は、現実の生命に触れる機会を失わせており、実験の機会を増やすことは、生命の見方を確かにするため、重要な課題といえる。

◎遺伝子改変：遺伝子を編集するまでに発展したバイオ技術は、遺伝子の変化で様々な可能性と危険性という両側面を出現させている。特に能力主義的社会の拡大と並行し、容易には社会適応しにくい意識も拡大している。「障害」

に対する「インクルーズ社会づくり」という建前」と「生産性がどうなのか」という本音」という意識の分離が深まり、更に「自己責任」という考えの広がりとともに「優生思想」の土壌となってきた。「生命の質」の選別としての出生前遺伝子検査、遺伝子治療などの広がりには、「障害」者の生きづらさを拡大している。

自己責任という考え方で、「障害」者をはじめとする社会適応が不利な自己への差別意識も広げてきた。したがって、「優生思想」の歴史を押さえ、優生思想が人権確立に対する差別性であることを触れた。

※人権学習の実践において、若者の自殺が拡大する今、能力主義の社会意識の反映としての「自己差別の解消」は、喫緊の課題だ。しかし、今までの学習テーマが自己の課題に焦点を合わせられたかは、疑問がある。誰彼のための差別解消では、教養としての人権学習になってしまう。

◎免疫：「腸内フローラ」との協働で成り立つ免疫システムという最新概念は、生命観の根底を変えてきている。特にコロナ下の消毒の過剰は、免疫形成途上の幼児の体内環境の侵害になるのではないかと危惧されている。自然免疫や腸内フローラの健全化が重視されることになるのではないか。

※シロアリと腸内原虫の共生観察でそれらの概念を伝える取り組みをしている。

b、ガリレオ・ニュートンらの科学革命の意義(物理基礎2年生)

◎17世紀科学革命：法則発見は、人々の暮らしなどにどう影響したか。科学の確立、科学的見方の浸透、それら考え方の広がり、ゆつくりとではあるが、人々の考え方に影響し、18世紀の市民革命に象徴される「自由・平等・財産確保の自由」などの近代的価値観の基礎になっていくという人権確立の話をした。

※例えば、中世ヨーロッパでの教会権力に支配された世界観では、庶民の生活する地上は、様々な欲望に支配された人間活動の場であり、「卑しい生活の場」であるときれ、金銭追及など庶民の生活は価値のないものと否定されてきた。神の教えに従い、教会に寄付をするなど、行いの良かった者は、死後、「神のおられる尊い天上の場」で救われるものと教えられてきた。したがって、教会によると、地上と天上の法則は別で、天上のことは庶民にうかがい知れないこととして聖職者達の教えが絶対視されていた。

庶民を教え導くとし教会も、王などの権力の一部として精神的支配の道具として働いていた事実が明らかになっている。ガリレオらが天上と地上の物理法則の一貫性を明らかにしていくことは、「天と地の尊卑」などの権威的常識を覆し、現世の欲望を否定せず、人々の心を解放していく原動力となって行った。

◎電気の有効な使用について(低額給与下、一人暮らし節約のため)：・給与の増えない日本の現状の中、電気料金計算のシュミレーションができることも経済的自立(人権課題の一つ)のための大切な条件だと考えられる。

※生徒たちのバーチャルな電気料金計算も全く現実には合わないわけではなかった。それぞれの生活様式を反映し面白い差が出てくるものだと感じた。多くの生徒は、計算していたが、中には、計算方法が分からない者もいた。

◎電磁波の害について：・携帯や送電線の周りの電磁波が、健康被害をもたらすかもしれないという話をした。

5Gの進捗が健康被害をもたらさないように危惧は必要ではないかと話した。

※二年の理科についてのアンケート

生活にとって大切な「理科」は、教科書にまとめてあることばかりではない、ありふれた生活の課題を自分なりに考えて、答えをだす、その答えでやってみて、又、良いのか考えて、修正すべきは、正し又やってみる。その繰り返しのための、考える道筋を学んで行こうという思いで「理科」の取り組み方の学習を目指してきたつもりです。日々の生活で変わるために、変えるためにどう力を注いだらよいか、その糸口を探る理科の勉強でありたいと思いました。

- ・物理の授業を通して、楽しく受けられたなと思います。人権的な話もしていただき考えさせられる話題ばかりでも良い授業だと思う。
- ・生活の中には物理がたくさんあるんだと感じた。電流は生活の中に電気器具として使っているんだとあらためて思いました。実験が多く楽しい授業を受けることができました。
- ・授業は教科書を使うことはほとんどなく自分たちの身近な問題について考えたりしました。教科書をまとめたりする以外のやり方もあるんだなと思いました。テーマの「計算を少なくして物理」は、苦手な私にはありがたかったです。

c、ガス・有機溶剤等と労災(化学基礎3年生)

◎労災は職場での重大な人権侵害だ。具体的事例をだし学び、もしも起こったらと想定しレポートしていった。就職生がほとんどで、各自のシュミレーションをしてみた。

※給与が上がらない職場実態から、民間保険の活用もなかなか多額は難しいことも考えた。

## ② コロナパニック中でどう科学的に考える

コロナパンデミックの広がりの中、生物基礎の内容でもかなりの合理的判断ができると考え、最新情報と原則的学習をしてみた。仮説として、「生物兵器」の可能性は十分考えられるものであった。「サイトカインストーム」の劇的な様子で世間はパニックに陥った。肺のリンパ液浸潤の過酷さが伝わった。アビガン・トリシズマム治療の可能性がニュースになったが、厚労省はアビガンを認めせず、遺伝子ワクチン一辺倒の路線をとった。どちらも緊急承認治療で平等なはずが、ひどい偏った政策が続けられている。

※最近、アビガンで在宅治療になりそうな90人ほどの患者を救った医師が謝罪させられた。行政が放置し、多数の死者が出たのに、逆立ちした社会が作り出されている。

これらの不合理性については、専門分野として授業で触れざるを得なかった。特に改変mRNAを細胞内に入れ、ヒト細胞内でスパイクタンパク(ウイルスの殻)を作らせるという荒業を1年未満の企業内治験後、全世界に治験として緊急承認させ、接種することの危険性はひどすぎるものだった。遺伝子改変食品の危険性を伝える科学的観点から言えば、あまりにずさんだった。だが各国政府は、ワクチン接種を絶対のものごとく実施していった。副作用で多くの人が死亡までしたのに、コロナの怖さという情報が凌駕し、科学的判断が吹き飛ばされてしまっていた。

今年の夏ごろには、スパイクタンパクの毒性が諸論文で指摘され、血管の障害と血栓形成の仕組みが判明し始めた。副作用での死亡者・障害が出たものが無視され、ワクチン一辺倒の防衛戦が有効だと言われ、やがて、変異株の出現で効かなくなったのと同じことが繰り返されてきた。とても合理的な医療どころではなくなっている。

生徒たちの家庭もワクチンを危惧する保護者も出ているが、ややもすると集団のため(全体主義的)などという論理をかざす世間の誤謬が生じてしまっている。危険性があれば検証する科学の原則が無視され、ワクチン死はありえない、関連性が証明されないという言葉だけが先行している。

政策の正当性のみが主張され、科学的検証がおろそかにされている暗黒のこの2年余りが歴史的にどう評価されるのだろうか。戦前の教師は戦争の愚かさ主張する者は排除された。コロナ政策のあまりのずさんさに直面し、教育の営みは、真実の、合理性の科学的探求ではないのかと悩みながら実践を続けている。命を守るために必要な情報は、仮説であっても生徒たちの判断材料として提供した。情報は人権確立の力だと考えた。

### ③教育課題が見え始めた子ども達に向き合う

1年前に、学習に集中できない子どもたちであった。それなりに必死に取り組み何とか学習に定着できる者も増えた。

Aさんは、その中でも確信的に提出物をなかなか出さない生徒である。本人



に話をしていくと拒否するようでもない。チョコチョコ話す中で、少しずつ距離が近づいて行った。昨年は、「人権学習会」はうまく機能しなかったが、今年は一年生も入会し、Aさんも、二年の先輩という立場で加わってきた。

ある日の学習会、中学のB先生が学習会に同席されたとき、Aさんと二年Cさんと二人の家庭の話になった。聞いているとなかなか大変な状況が少し見えてきた。二人とも中学の時からB先生と学習会に参加していたことも分かった。学習に集中できないことも、子どもたちの生活から見えてくる気が出てきた。そこから子どもたちの教育課題が少しずつ整理されてくるのではないかと考えている。

親と子は、しっかりとつながっているのか、人生を考え前向きに学ぶ条件はどれほどあるのだろうか、など、様々な問が浮かんでくる。だが、それらが、学校という仕組みの中で少しでも解決されていくには、かなりの関わりと話し込みの中で情報が整理され、確信として課題が明らかにならねばならない。Aさん、Cさんなどの奪われてきたものはあるのか、あるとしたらそれはここでどう補えるのか。学校という機能集団の力でどこまで進められるのか、進めるところまで進む。枠組みを限定するのではなく、子どもたちといけるところまで行くことだと思っている。

#### ④ 進路保障の課題

子どもたちが、この地に生まれ、親や地域の人々の課題を受け継いで生きていく。そのような道筋もかつて人権教育のあらすじとしてあった。小国地区において、超高齢化過疎化が進む現実の中で、親たちは子どもたちにとどのような願いを託すのだろうか。多くの親たちは、子どもの選択に任せるしかないと考えているのではないか。今の事態に有効な打開策が見出しにくい中、コロナは過密な都市部の不安材料を露呈させた。またコロナ下の経済の破壊をまざまざと見せつけた。全体として先の見えない不安材料が多発し、インフレや不況で、サバイバル状況も深刻さを増している。

国公立大学進学というとき、その背後に子どもたちの家庭のどのような生活実態が反映しているのだろうか。親も子も現状の厳しさを抱え選択をし、今の現状があるのだろうかと思う。

##### a、「生命・環境ゼミ」の医療系特別学習会

医療・福祉系の選択者は、専門性が高く進学して途中で進路変更がしにくい。そのため、事前に専門に進む心構えや分野の知識水準を上げておく必要があると考えられる。一学期の終わりに、二年が空いていたので、ゼミの延長線で四つ位の学習会を組んでみた。「ターミナルケア」・「ターミナルケアⅡ」・「パターナリズムとインフォームドコンセント」・「チーム医療」と、四講座という形だ。

最後の回は、参加者が集まらなかったが、三つは開催し、毎回4〜5名は参加し、意見交流を行った。二十年前に別の高校でやっていたので、中身は何とかなると考えたが、事前学習すると、インフォームドコンセントの流れは、患者側の

知識レベルの低さで進んでいないこと、したがって病院内で患者の意識を高める態勢が整備されつつあるという大病院の状況などが分かってきた。時代の変化は確実に進んでいくものだと感嘆させられた。

b、「生命・環境ゼミ」

現在まで24回にわたり、大学進学への面接・小論文などのやや抽象的な様々な問題群を扱い、意見交流をし、発言力・構想力の刺激となるように進んできた。参加者からは、一年生を中心に、楽しい学習交流であるとの意見もあるが、広がりを持つには至っていない。(一年生参加2名、二年生時々参加5〜6名)命や環境の問題群を中心に外国人・宗教・ハロウィンなどその時々々の市井の話題も盛り込みつつ、未来の社会を構想する場も持ってきた。生徒たちの不安な状況も垣間見え命に対する意識の違いなども感じてきている。

地方においても社会の最前線の問題群を高校生なりに考えてみることで、どのような効果をもたらすのかは、まだはっきりとはしないが、それぞれのテーマに彼らなりの意見を表明する様子は、私自身の学習の場であり、次の学習の課題を考える最高の場になっている。もちろん、人権感覚を切磋琢磨する場であることは、間違いないと考えている。

### ⑤ 伝えること・学ぶこと

現在、校内の人権教育担当の部会に所属させていただいている。40年あまり被差別の子ども達の学習会などにかかわらせてもらってきた。基本は、「学ぶこと」ばかりだった。特に、差別と闘う学習会の中では、大きなエネルギーをもらってきたように思う。差別されるから大変だろうというのは、勝手な思い込みだった。共に闘う集団を生み出しつつ、人生の課題と取り組む姿には雄々しさばかりを感じさせられてきた。課題を自覚した子ども達は、恐ろしく成長していくものだと思い知った。

今、ここにいてそれらの子どもたちから託された解放への熱い思いを周囲の先生たちと共有できたらと、できる話をぼつぼつしている。私が学べたことが果たして正しい方向に向いているのかは、はっきりとは分からない。地域や人が異なれば、その人々の真実は違ってくるのは、当然だと思う。ただ、差別をなくそうとしている人々の熱い思いは、同じなのではないかと思っている。

歴史的条件のない、人権が確立されにくい私たちのこの地に、悪戦苦闘して差別をなくそう、自己を見直そうという動きを創ってきた人々、共に私自身も逃げずに、自らの願いを闘いとしてきたことが、真実と認められるなら誇りと思う。

要は、自分の課題を見定め粘り強く取り組み、闘い続けることだと思えるようになった。他人(ひと)の闘いは請け負うものではない、同じ方向なら共に手を携えよう。そう思えるようになった。人権教育も少し自分の一部になったのではないか。

(藪 芳郎)

## 資本所有からの経営の分離

—カール・マルクスと向坂逸郎（4）—

### 資本主義の完成と株式会社と独占資本

向坂逸郎は『日本独占資本について』（『マルクス経済学の基本問題』岩波書店、364～369頁）の中でこう書いている。

**資本主義の完成** 「資本主義は、人間労働の搾取形態を資本で示し、搾取労働を剰余価値として言いあらわした。資本は、人間労働の搾取関係という人間の社会的関係である。剰余価値を取得しない、いかえると価値増殖しない資本は資本ではない。だから、資本主義は、価値増殖、つまり人間労働の搾取を自己目的としている。人間のために、富の生産があるのではなくして、剰余価値のために、おおざっぱに不正確な言葉でいわれるように、利潤のために、金もうけのために、貨殖のためにあるのである。

ここでは、人間は、資本という価値増殖の神に仕えている。貨殖は神の絶対命令なのである。それは当然なことであって、疑いを許さないものとなっている。資本という人間関係が、人間のかなたにある物神としての存在を露骨に示すようになればなるほど、資本主義は完成されているのである。（中略）

**経営者—資本の神官** 資本という神も、人間によってつくられた。資本所有と経営の分離という言葉でいい表わされる事態は、神と神官との関係によく似ている。資本所有が、「経営者」から分離するほど、資本として完成される。しかし資本は自ら命令し指図することはできない。この命令や指図に、人身的恣意のはいる余地があるほど、資本には非合理性が影響し、資本本来の性質からでなく、人間の恣意から滅亡したりする危険がある。「しにせ」が三代目の道楽で倒産するのは、古い型の資本である。

資本も、それ自身の中に倒産する性質を含んでいる。しかし、その破滅は、ある場合起るにしても、資本の論理そのものからくるものでなければならぬ。したがって資本は、その性格から、できる限り人間的要素、感情的行動を排除する。資本所有から「経営」が分離する必然を、資本そのものが含んでいるのである。資本所有は貨殖を意味している。貨殖なき、さらにできるだけ大きな貨殖なき資本所有は、無意味である。しかし、資本所有には、まだ人間的要素がまつわりついている。資本所有者の個人的人間的欲望は、時として資本そのものの破滅を意味することがある。資本は、このようにして、すべての個人的欲望からはなれて、資本として厳存する要求を持つようになる。資本所有者個人の欲望を抑えて、資本そのものの存在を確保することが要求される。資本が自主的な存在に転化される。そしてできるだけ、人間的要素に邪魔されないで、自己の論理を貫こうとする。そのためには「経営者」の存在が必要になつてくる。「経営者」とは、できるだけ資本の純粋な論理をおしすすめる資本の神

官である。

物神性の最高の姿 したがって、「経営者」は、資本との利害関係にうとくならないという考えほど誤りなのはない。逆である。資本の純粹な論理を、したがって価値増殖（いいかえると人間労働の搾取）をまもり、維持し、発展させようとする努力に、「経営者」ほど熱心な者はいない。かれらの存在そのものが資本の論理を純粹に貫くという職務によるものだからである。（中略）

「経営者」による経営によって、資本の物神的性格が、最高の姿を見せる。だから「経営者」は、個人的資本家にくらべると、冷静であり、冷酷である。資本主義の限度内で可能な一切人間関係から抽象された「資本」を代行するからである。（中略）したがってまた、資本の存続と蓄積が必要とする「生産性向上」の要請がある場合には、人間（働く意志と肉体をもつ労働者）の「首切り」をやらなければならぬ。経済不況が、人員整理を要求する場合には、これも資本の存続と蓄積のために、遂行されなければならない。現にこの要求にしたがって六十万に近い完全失業者が生じている。それは「経営者」の人柄からくることではない。「経営者」がどんなに「人格者」であっても、資本が要求する場合には、この命令に従うほかはない。そうでないと、資本は自らの滅亡をもって、これに復讐する。あるいはこの「経営者」そのものを「首に」する。（中略）

「株式会社においては、機能が資本所有から分離され、したがって労働も生産手段および剰余労働の所有から全く分離されている。資本主義的生産の最高の発展のこのような結果こそは、資本が生産者の所有に、しかしもはや個別的生産者の私有としてではなく、結合された生産者たる彼らの所有として、直接の社会有として、再転化される途上の必然的な通過点である。また他面では、従来はなお資本所有と結合されていた再生産過程における一切の機能が、結合生産者の単なる諸機能に、社会的諸機能に、転化される途上の通過点である。」（『資本論』岩波文庫版、第7分冊176頁）

**株式会社の弁証法** マルクスは、株式会社の性格をこのように述べ、「それは、資本主義的生産様式そのものの限界内における、私的所有としての資本の止揚である」（同上175頁）といっている。エンゲルスは、さらにこのところで、独占資本の展開するこのような「止揚」について追加している。

しかし、独占資本の支配する今日の資本主義で、銀行その他の金融機関と産業資本との、株式所有、金融、人的要素をもってする結合、独占的巨大大資本が、相互的に株式を所有し合うことによって生まれる結合、この縦横に錯綜した社会的結合、この結合を担う「経営者」の資本所有からの相対的独立性、逆に言えば、このように結合した「社会的」資本の個々の人間からの相対的独立性、等々の状態を、マルクス・エンゲルスが見るならば、「また他面では、従来はなお資本所有と結合されていた再生産過程における一切の機能が、結合生産者の単なる諸機能に、社会的諸機能に、転化される途上の通過点」が、このように明瞭に現れたことに驚嘆するであろう。そして、

われわれは、株式会社の少年時代にその性格を把握して、その社会的性質の展開を予言することのできた天才の理論的洞察力の前に頭のさがる思いがする。」

資本の経営が所有から分離され、株式会社が生まれ発展し、独占的巨資資本が支配することによって資本主義が完成し、頂点に達していること、次の段階は労働者階級によって独占資本を収奪し、生産手段を労働者国民の共有に転化する以外にないことを、斎藤幸平君はすなおに学ぶべきではないか。  
(原 野人)

## 唯物弁証法「否定の否定」

— 斎藤君はマルクスをどう歪めているか (九) —

### 弁証法

マルクス、ヘーゲルを学び始めた者—ぼくもそうでした—が、ちっともわかっちゃいないのに、ホラ吹き男爵(だんしゃく)をまねるのが、弁証法、否定の否定との哲学用語の概念とその解釈です。「否定の否定」という概念は、ヘーゲルに始まり、唯物論的弁証法でも説かれ、哲学教科書、入門書は、①ヘーゲルの概念的弁証法は、肯定、否定、否定の否定という形をとって進む、②この否定の否定は、否定によって豊にされた肯定であり、総合であると解釈します。そして、弁証法を概念進行の形式だけに注目し、それを現実の歴史の進行にあてはめてしまいます。

弁証法的思考を駆使し実践したのがレーニンです。全集にざっと眼をとおすだけでもじつによくわかります。現実の矛盾を分析し、古い矛盾がどのように新しい矛盾に転化しているかを明らかにし、その新しい矛盾をどのように高次の矛盾に発展させるかを考えぬき、実践のための方策を打ち出しているからです。

### レーニン

レーニンの珠玉の論稿『カール・マルクス』で、レーニンは弁証法、否定の否定について、じつに生き生きと具体的にこう書いています。

【今日では、発展、進化の思想はほとんど完全に社会的意識のなかにしみこんでいるが、これはヘーゲルの哲学を通じてではなく、他の道からきたものである。しかし、マルクスとエンゲルスが、ヘーゲルにもとづいて定式化した形での、この思想は、流行の進化思想よりも、はるかに全面的で、はるかに内容が豊かである。すでに経過した諸段階をくりかえすかのように見えながら、それらを別の仕方、いっそう高い土台のうえでくりかえすところの発展(「否定の否定」)、直線的にはなく、いわば螺旋的な発展、——飛躍的な、激変的な、革命的な発展——「漸次性の中絶」、量の質への転化、——ある一定の物体に対して、またはある一定の現象の範囲内で、またはある一定の社会の内部で作用しているさまざまな力や傾向の矛盾、衝突によって生ずる、発展への内的衝動、——それぞれの現象のあらゆる側面(かつまた歴史はますます

す新しい側面を開いてゆくのである)の相互依存性ともっとも緊密な、切りはなしえない連関、単一の、合法的な世界的運動過程をなしている連関、——こうしたものが、発展についての、(通常の学説よりも)ずっと内容の豊かな学説としての弁証法の若干の特質である。】(『カール・マルクス』岩波文庫版21頁)

これが「発展についての、ずっと豊かな学説としての弁証法の特質」だということです。レーニンの偉さは、弁証法の正しい概念を右のように「連関と発展のモメントとしての否定」、「より低い段階の一定の特徵、性質、等がより高い段階でくり返されること、および古いものへの外見上の復帰(否定の否定)」と定義づけていることです。

レーニンは「弁証法における否定とは、単に否と言うことだけでなく、ある事物が存在しないということだけでもない。……あらゆる種類の事物は、否定によって発展が生じてくるように否定されるための、それに特有の仕方をもっている」を論理的、抽象的に発展させただけでなく、資本主義の発展がひじょうに遅れたロシアにおいて、マルクスとエンゲルス理論を適応し、革命を成功させ、発展させたということです。レーニンは弁証法、唯物論的歴史観を駆使し、社会主義革命を実践したのです。

## 向坂

マルクス、エンゲルス、レーニンのこの世界観を日本で発展させ、実践したのが向坂逸郎です。向坂の唯物弁証法は『労働者の世界観』(労大新書)、『資本論入門』(岩波新書)にやさしく、くわしく説かれています。次のようになります。

【マルクスは、歴史における唯物論者として「史的唯物論」者となったのである。つまり、人間の歴史的实践を、唯物論的にとらえなければならぬとした。人間の行為、人間の自由は、従来のように観念論にまかせらるべきものでなく、歴史発展の法則が唯物論的に説明さるべきものとした。これをマルクスは『資本論』で心ゆくばかり明らかにした。資本主義社会は、運動法則をもっている。この運動は、単なるくり返しではない。唯物弁証法がとらえるように、発展である。資本主義の量的発展が、質的発展(革命的転化)をするように推しつめられて行く。量の質への転化、質の量への転化を、なしとげる。『資本論』の第一巻第二三章は、このことを明らかにしている。題して「資本主義的蓄積の一般的法則」という。資本の量的発展が、質的転換をする歴史的条件を明白にしている。】(『労働者の世界観』(2000〜2001頁))

さらにレーニンについて、「マルクスの弁証法的唯物論を自分のものとし、歴史の上で現実にした」人と、たいへん評価しています。ソ連という社会主義国家は社会主義世界体制の「弱い環」であった東欧の社会主義国、ソ連への経済戦争、思想戦争という帝国主義勢力の反抗で、今、世界は反動期にあります。向坂先生が存命なら、社会主義への移行は歴史的必然だ、こんな時こそ学習、学習、学習だとムチを振るわれていることでしょう。

## 「否定の否定」

さらに引用した向坂のやさしくわかりやすい文章に、学者たちが悪戦苦闘する「量から質への転化」、あるいは「否定の否定」の正しい理解が語り尽くされています。「否定の否定」、「量から質への転化」が述べられているのは、『資本論第一巻』の第二四章、いわゆる本源的蓄積の最終節である「第7節 資本主義的蓄積の歴史的傾向」の末尾、岩波文庫では第3分冊414頁から416頁です。

マルクスは、かつて小経営がそれ自身の発展によってみずからの滅亡のための、すなわち小所有者の収奪のための諸条件を必然的に生み出したのとまったく同じように、いまや資本主義的生産様式もやはり、自己の没落を不可避とする物質的条件を自ら生み出したということを、歴史的に証明し、ここで簡潔にまとめていくことです。

マルクスは「資本主義的生産様式および取得様式は、したがって資本主義的な私的所有は、自己労働に基礎をおく個人的な私的所有の第一の否定である。資本主義的生産の否定は、資本主義的生産そのものによって、自然過程のもつ必然性をもって生みだされる。それは否定の否定である」と述べています。

原野人さんが「カール・マルクスと向坂」と題し、連載をはじめていらっしゃる。その原さんがいつも強調する箇所でもあるのです。重複しないよう、関連する部分を引用します。ここで注意しなければならぬのは『資本論』第一巻第二四章の最後の節である資本主義的蓄積の歴史的傾向で、社会主義社会の移行の必然性を説き明かしたうえで、述べていることです。

【労働者がプロレタリアに、その労働諸条件が資本に転化されれば、資本主義的生産様式が自己の足で立つにいたれば、労働のさらにそれ以上の社会化と、土地その他の生産手段の、社会的に利用される、したがって、共同的な生産手段への、さらにそれ以上の転化、したがって、私有者のさらにそれ以上の収奪は、一つの新たな形態をとる。いまや収奪されるべきものは、もはや自営的な労働者ではなく、多くの労働者を搾取しつつある資本家である。(中略)

資本主義的生産様式から生ずる資本主義的領有様式は、したがって、資本主義的私有は、自己の労働に基づく個別的な私有の第一の否定である。しかし、資本主義的生産は、一種の自然過程の必然性をもって、それ自身の否定を生み出す。それは否定の否定である。この否定は、私有を再興するのではないが、しかししたしかに、資本主義時代の成果を基礎とする、すなわち、協同と土地および労働そのものによって生産された生産手段の共有とを基礎とする、個別的私有をつくり出す。

言うまでもなく、個人の自己労働にもとづく分散的私有の資本主義的私有への転化は、事実上すでに社会的生産経営に立脚する、資本主義的所有の社会的所有への転化に比すれば、比較にならないほど長く、苛酷で、困難な過程である。前のばあいには、少数の篡奪者による民衆の収奪が行なわれたのであるが、後のばあいには、民衆による少数の篡奪者の収奪が行なわれるのである。】

マルクスが言っていることは、①収奪者の収奪によってつくり出される状況は個人的所有者の再興であるが、②土地および労働そのものによって生産された生産手段の社会的所有を基礎としての再興であると言うことです。ここで言っていることは社会的所有にはいるのは土地その他の生産手段であり、個人的所有にはいるのは生産物、すなわち消費対象ということで、斎藤君がいうように、「地球全体を「管理」することではありません。ここでも彼はマルクスを歪曲しているのです。」（滝野 忠）

### ◇読者からのおたより◇

**階級意識を強める** 第2次岸田内閣が成立し、国会も聞かれました。新しい資本主義社会をとのスローガンですが、立候補当時の公約はガラリと変えて、安倍・菅内閣の延長線上の実体が明瞭となりました。現在の日本は経済団体連合会の独占支配国ですから当然です。

消費税が始まって約三十二年、社会保障の為のはずが、実際には大企業の減税に使われて、社会保障には十八%しか使われていません。小生九十五歳八月、両親両親父母六人長命のお陰で元気に働けます。階級意識を強め「人類社会の平和的発展」に努力を続けます。皆様方の御健康を祈ります。末筆ではございますが、来たる松山市議選挙での梶原市議への応援を宜しく願います。

【追伸】電動自転車で紙誌を配達しています。高橋章哲市議からの『社会通信』は愛読しています。

血糖値 5・7、血圧 120と70代、歯 28本健在、155cm、62kg。（新居浜市 真鍋知己）

**改憲勢力3分の2議席を阻止する** 林市長のカジノ誘致に対する2年間の闘いは、8月の市長選挙で決着をつける闘いでした。横浜で千人超のコロナ感染者が出る状況でカジノ誘致反対、コロナ対策等を訴えた山中候補が自民党小此木候補（元国家公安委員長）に18万票の差をつけて当選しました。そして菅政権は退陣しました。

岸田政権は、「新しい資本主義」などと目先を変え、安倍政治を継承し総選挙で自民単独で過半数を獲得し、維新の議席増で衆議院議席の3分の2を占めました。中国脅威を煽り南西諸島への自衛隊配備、「敵基地攻撃能力」の具体化等で防衛費（軍事費）をGDPの2%へ（引上げまで言っています）。

参院選挙では「戦争のない、コロナ禍での窮乏者の救済、そして安心して生活できる」社会の実現と共に、岸田政権の狙いが一度「改憲国民投票」を実施し次に自民党の本丸である、9条第2項に自衛隊明記であることを訴えていきます。そして、立憲野党の統一候補で自公・維新改憲勢力の3分の2議席を阻止するために仲間と共に闘う決意です。

**野党共闘で頑張りました** 甲府駅前の信玄公にはお世話になりました。甲斐市9条の会も4年生になりました。ストップブリーニア裁判で東京地裁へも行きました。衆議院選挙は野党共闘で頑張りました。今年も忙しくなりそうです。（山梨県甲斐市 小田切博）

**晩酌を減らし読書の時間を増やす** 資本主義の矛盾は確実に深まっていますが、その好条件を活かすことができるような状態にないのも事実です。だからこそ、地道にしっかりと私たちの力量を高めることができるような年になりたいと思います。今年もよろしく願っています。

一日一日を大切に生きなければと思いつつ1年がアツという間に過ぎ去っていくことに焦りを感じる今日この頃、晩酌を減らし読書の時間を増やすことが新年の目標かな？（北海道 佐竹要）  
**古典学習の取り組み 今年も** 昨年は、学校花壇の花づくり・和太鼓・空手を通して、児童

・生徒たちの成長を手助けし、個人的には、古典学習に取り組んできました。今年も、昨年同様に続けていければとおもっています。（東京都八王子市 蓑輪泰臣）